

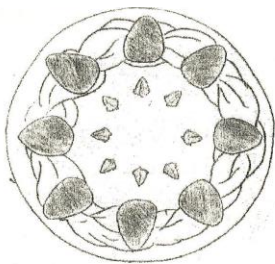
「公平とは何かを考えよう」



校長 吉田 尚子

先日、人権を扱った授業で、『Aさん16歳、Bさん12歳、Cさん10歳の兄弟が、お金を出し合ってお店でケーキを買い、家に帰って分けようとしています。3人で公平に分けるにはどうしたらいいでしょう。』という問題がありました。

購入しようとするケーキには、いちごが8個ついているので、3人では公平に分けることができず、子どもたちは一気に困ります。また、ケーキを買うために出したお金も、兄弟それぞれ600円、400円、200円と違います。更には、お腹がすいているお兄さん、誕生日を控えた弟、ケーキが大好きな末っ子と条件も違うので、何をもとに「公平」を考えたらいいのかがわからなくなり、答えに苦しみます。



「やっぱり3人だから、3分の1ずつ同じ大きさに分ければいい。」「お兄さんのAさんがお金を1番出したから、お金を出したAさんが1番大きなケーキを食べるべき。」…色々な考えが子どもたちの中から出てきます。

子どもたちなりに、今までの経験を活かしながら、「公平に分けるにはどうしたらいいか。」を真剣に考えます。

しかしそんな中、「1週間後に誕生日を迎えるBさんが1番大きなケーキを食べればいい。」や、「出したお金は少なくとも、ケーキの好きな末っ子のCさんがたくさん食べるといいんじゃないか。」という意見も出てきました。

この意見を言った子どものご家族について、私は知りません。しかし、この考えの裏側には、毎日、家族のあたたかな笑顔に囲まれて生活している子どもの姿が目に見え、うれしい気持ちになるのは私だけでしょうか。

子どもにとって、成長するということは、少しずつ大人の世界を学ぶということです。そしてその中には、今回のように算数の計算式では割り切れないことがたくさんあります。それらに出会った時、どう対応していくかは、その子自身がそれまでに経験したことがもととなります。

未熟で柔軟な時期であるからこそ、小さな子どものうちに周りの人から与えられた教養は、大人として生きる上での大切な礎になるに違いありません。

豊かな人情に育まれるということの意味を、もう一度考えてみたいと思います。

